関西方言の格配列：有標性と頻度の観点から

中川奈津子

国立国語研究所
nakagawanatuko@gmail.com

2020/9/20

NINJAL

はじめに

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 関西方言の格標示体系を考察
- 分裂自動詞型と能格-絶対格型が混在
- 主に東京方言の先行研究と合わせて、なぜこのような複雑な体系になっているのか議論

NINJAL

発表者の立場

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 理論的立場: 機能主義、認知主義
- 機能主義: 文法は言語使用によって動機づけられている
- 認知主義: 言語はヒトの情報処理能力に制約されている

NINJAL

有標性と頻度

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 有標性 (Comrie (1979, 1983); Haspelmath (2006), see also Jaeger (2010))
  - 頻度が高い: 表現が短い (無標識)
  - 頻度が低い: 表現が長い (有標識)
- 主題と焦点はそれぞれ表（次頁）の典型的な変数を持つ (Givón, 1976; Keenan, 1976; Du Bois, 1987)
- 典型的: 共起する頻度が高い =無標識になりやすい
  - 典型的な主題の例: 主語、定、有生、動作主、旧情報
  - 典型的な焦点の例: 目的語、不定、無生、被動作主、新情報
- 非典型的: 共起する頻度が低い =有標識になりやすい
  - 非典型的な主題の例: 目的語、無生、被動作主的
  - 非典型的な焦点の例: 主語、有生、動作主的

情報構造と相関する変数

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

Table: 情報構造と相関する変数

	主題	焦点
定性	定	不定
有生性	有生	無生
動作主性	動作主	被動作主
	(A, S_A, S_P, P)	
情報のステータス	旧情報	新情報
断定性	前提	断定
...		

- 各々の変数は連続的で、境界は言語によって異なると想定; 主題度、焦点度
- A: 他動詞構文の動作主項
- S: 自動詞構文の唯一項（S_A: 動作主的 S、S_P: 非動作主的 S）
- P: 他動詞構文の被動作主項

トルコ語

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 不定の P は無標識、定の P は有標識（*I*が後接）(Comrie, 1983, p. 95)

(1) a. Ali bir kitap aldI
Ali indef book bought
'Ali bought a book.' (不定 P・無標識)

b. Ali kitab-I aldI
Ali book-acc bought
'Ali bought the book.' (定 P・有標識)

アルメニア語

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 有生かつ定の P だけ標識*-u*が後接 (Comrie, 1983, p. 96)

(2)

a. mek {mard/girk^{h}} tesa
a {man/book} 1sg.saw
'I saw a {man/book}.' (不定 P・無標識)

b. girk^{h}-ə tesa
book-def 1sg.saw
'I saw the book.' (定・無生 P・無標識)

c. mard-u-n tesa
man-acc-def 1sg.saw
'I saw the man.' (定・有生 P・有標識)

NINJAL

本発表の主張

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 日本語でもトルコ語やアルメニア語のようなことが起こっている
- より多くの変数がからみ、複雑に
- 主に東京方言に関する無標識項（＝無助詞名詞句）の先行研究をもとに検証
- 関西方言が異なる部分は、先行研究、発表者（滋賀県長浜市出身）の直感をもとに比較
- 分裂自動詞型と能格-絶対格型が混在
- 主に東京方言の先行研究と合わせて、なぜこのような複雑な体系になっているのか議論
- コーパス調査により、典型的な主題・焦点の頻度が本当に高いのか検証

NINJAL

アウトライン

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

1 はじめに

2 情報構造関連の要因

3 情報構造とは独立の要因

4 コーパス調査

5 おわりに

6 Appendix

NINJAL

アウトライン

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

1 はじめに

2 情報構造関連の要因

3 情報構造とは独立の要因

4 コーパス調査

5 おわりに

6 Appendix

NINJAL

対比性

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 対比の主題には常にハが後続する (Tsutsui, 1984, p. 53ff.)
- 関西方言では対比の P ((3-b), 特に「酒は」) だけハ必要

(3) a. 僕 {は/??∅}泳いだけどビル {は/??∅}泳がなかったよ

b. 僕 {は/∅}、ビール {は/??∅}飲むけど酒 {は/??∅}飲まない (Tsutsui, 1984, p. 54 から修正)[1]

(4) ケーキとアイスどこ？–ケーキ {は/??∅}食べたけどアイス {は/??∅}食べてへんよ (Nakagawa, 2013a, p. 20)

[1] Tsutsui (1984) の例文はフォーマルな文体だが、フォーマルな文体はそれ自体、有標識で表れやすい環境なので (「スタイル」の節参照)、例文を全てカジュアルな文体に修正した。

項焦点

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 項焦点 (argument focus, narrow focus) には常に格助詞が後続する (Tsutsui, 1984, p. 93ff.)
- Fujii and Ono (2000) も参照

(5) Q: レストランでスパゲティ食べたの？
A: 僕はステーキ {を/??∅}食べたんだよ (Tsutsui, 1984, p. 93 にコンテクストを追加)

(6) Q: どの本が面白いの？
A: この本 {が/??∅}面白いよ (op.cit.: p. 94)

項焦点: 関西方言

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 関西（京都市）方言では、項構造、有生性と相互作用 (竹内・松丸, 2019) → 後述

NINJAL

定性

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 主語（主題と相関）
- 定性が強い A, S (代名詞と固有名詞) は無標識になりやすい (Fry, 2001, p. 128ff.)
  - 関西方言
  - S が焦点の一部、埋め込み文の環境に置かれると、定名詞句のほうがガが後続しやすい (中川, 2020)
- 目的語（焦点と相関）
  - 不定の P は、定の P よりも無標識になりやすい (Minashima, 2001)
  - Fry (2001, p. 128ff.) の結果はこれを支持

有生性

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 主語（主題と相関）
- 無生よりも有生の A, S のほうが無標識になりやすい (Fry, 2001, p. 128ff.)
  - 関西方言
  - 項焦点かつ有生 A, S_A はガ必須、無生名詞句は A のみガ必須 (竹内・松丸, 2019)
  - S が焦点の一部、埋め込み文の環境に置かれると、有生名詞句のほうがガが後続しやすい (中川, 2020)
- 目的語（焦点と相関）
  - 有生の P が有標識になりやすい (Kurumada and Jaeger, 2013, 2015)

名詞の意外性

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 名詞句の予測可能性が無標性に関わる (丹羽, 2006; Kurumada and Jaeger, 2013, 2015)

(7) a. 雨 {が/∅}降るかもしれないんだって
b. 雹 {が/?∅}降るかもしれないんだって (丹羽, 2006, p. 290)

(8) a. 医者 が患者 {を/∅}病室で手当した → 無標識になりやすい
b. 患者 が医者 {を/∅}病室で待った
(Kurumada and Jaeger, 2013, p. 860 から翻訳)

語順

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 主題でない（焦点である）名詞句は、動詞の直前にあるときに無標識になりやすい (丹羽, 2006, p. 293)
- 動詞の直前は焦点位置 (Kuno, 1978; 遠藤, 2014; Nakagawa, 2016, to appear)

(9) a. おい、経理課にすごい可愛い子 {が/∅}入ったぞ
b. おい、すごい可愛い子 {が/?∅}経理課に入ったぞ
(丹羽, 2006, p. 293)

- 主題名詞句は文頭にあるときに無標識になりやすい (op.cit.: p. 294)
- (10-a) よりも (10-b) のほうが自然

(10) (新人の「あの子」が話題になっている)
a. おい、経理課にあの子 {が/∅}入ったぞ
b. おい、あの子 {が/∅}経理課に入ったぞ

動作主性

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- Tateishi (1989); 影山 (1993): 無標識は V′ の中でのみ自然
- ステージレベル述語 or非対格述語の主語は V′ の中にあるので無標識が自然
  - ステージレベル述語: 一定の時間しか成り立たない事態を表す述語 (Carlson, 1977)
  - 非対格述語（S_P）: 非意図的な動作を表す述語 (Perlmutter, 1978)。
- 個体レベル述語 or非能格述語の主語は V′ の外にあるので有標識のほうが自然
  - 個体レベル述語: 個体にとって恒久的に成り立つ述語。
  - 非能格述語（S_A）: 意図的な動作を表す述語。

動作主性

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

(11) 非対格述語（S_P）

a. 田中さん {が/∅}亡くなった の知らなかった

b. テレビのニュースでタンカー {が/∅}沈没する ところ見たよ (影山, 1993, p. 56)

(12) 非能格述語（S_A）

a. 子供たち {が/?*∅}騒ぐ の見たことない

b. 患者 {が/?*∅}暴れた の知ってますか (ibid.)

- Nakagawa (2016, to appear); 下地 (2019) でも同様の傾向を確認
- 東京方言は分裂自動詞型の格体系を持つと主張

動作主性: 関西方言

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 関西方言では、焦点の一部・埋め込み文における S の動作主性によるガの出現のしやすさは認められない (中川, 2020)
- ただし、項焦点のときは違いがあり、有生性階層と相互作用 (竹内・松丸, 2019)

(13) 誰が倒れたん？–{オレ/アイツ}{ガ/#∅} 倒レテン (op.cit.:p.76)

Table: 京都市方言の項焦点構文における格配列と有生性

	A	S		P	
		S_A	S_P		
代名詞	ガ	ガ	ガ	∅	(主格-対格型)
有生	ガ	ガ	ガ/∅	∅	(分裂自動詞型)
無生	ガ	ガ/∅	ガ/∅	∅	(能格-絶対格型)

(竹内・松丸 (2019, p. 77) をもとに発表者作成)

動作主性: 関西方言

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 文焦点構文、埋め込み文では、関西方言は能格-絶対格型である (Nakagawa, 2013a,b)

(14) a. あ！ネコ {が/??∅} ネズミ追いかけてる！
b. ネズミどこいったん？–ネコ {が/??∅}追いかけてたよ (A)

(15) a. あ！あんなとこで子ども {が/∅}遊んどる！
b. あ！あんなとこに子ども {が/∅}倒れとる！ (S)

Table: 関西方言の文焦点構文における格配列

A	S		P	
	S_A	S_P		
ガ	ガ/∅	ガ/∅	∅	(能格-絶対格型)

(Nakagawa (2013a,b) をもとに発表者作成)

アウトライン

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

1 はじめに

2 情報構造関連の要因

3 情報構造とは独立の要因

4 コーパス調査

5 おわりに

6 Appendix

NINJAL

ハもガも使えない文

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 疑問文の中の名詞句は無標識になりやすい (Makino and Tsutsui, 1986; Backhouse, 1993)
- ハもガも不自然 (尾上, 1987)

(16) 何か紙とペンある？ (Fry, 2001, p. 120)

(17) a. 富士山見える？
b. ロシア語読める？ (尾上, 1987, p. 48)

NINJAL

ハもガも使えない文

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- ガが使えない理由
- 疑問文 (16), (17) では、述語に焦点があたっている
- 質問のミニマムな答えはそれぞれ、「ある」、「見える」、「読める」
- 「紙とペン」、「富士山」、「ロシア語」に (だけ) 焦点があたってはならない
- 「ある」、「見える」、「読める」のような状態述語のとき、ガは項焦点 (argument focus, 総記のガ) と解釈されやすい (Kuno (1973), (18))
- よって、(16), (17) ではガが使いにくい

(18)　太郎が学生だ

ハもガも使えない文

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- ハが使えない理由
- ハは、聞き手がその対象について今注意を向けているであろうと話し手が想定している名詞句に後続する (Nakagawa (2016, to appear), (19) vs. (20))
- 「紙とペン」、「富士山」、「ロシア語」に聞き手が注意を向けているとは想定できないので、ハも使えない

ハもガも使えない文

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

(19) S と H はルームメイトで、長いこと部屋に出るネズミに悩まされている。彼らはついにネズミをつかまえる罠を準備した。しかし 2 人が飼っている猫が先にネズミをつかまえた。これを S は見ていた。H はその場にいなかったので S は H が帰ってきたらこの事実を教えてあげようと思っていたら、今 H が帰ってきた。

S: ネズミ {? は/∅}猫がつかまえたよ
S′: ?猫がネズミ {は/∅}つかまえたよ (Nakagawa, 2016, to appear, p. 107)

(20) H は今帰ってきて、しかけた罠を覗いている。

S: ネズミ {は/∅}猫がつかまえたよ (op.cit.: p. 109)

ハもガも使えない文

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 「紙とペン」、「富士山」、「ロシア語」に聞き手が注意を向けていると想定できる場合は、ハが使える

(21)
a. 説明会に行くならメモ取ったほうが絶対いいよ。紙とペンはある？
b. (富士山の近くに旅行へ行く相談をしていて) もうホテル予約してくれたんだ。ありがとう。その部屋から富士山は見える？
c. (ロシア留学したいという友達の話を聞いて) え、ロシア語は読めるの？

ハもガも使えない文

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 疑問文ではない以下の例も同様に考えることができる (Nakagawa, 2016, to appear)

(22) a. これおいしいよ (尾上, 1987, p. 48)
b. (メールの返信で) 10 日大丈夫です

- ハもガも使えず、無標識しか後続できない名詞句は、主題度と焦点度の両方が高い
- 主題度が高い: 話し手と聞き手が共有している (「富士山」(17-a)、「ロシア語」(17-b)、「ネズミ」(19))
- 焦点度が高い: 談話で始めて言及する (新情報)
- このような名詞句は、主題かつ焦点とみなすことが妥当と考える

NINJAL

スタイル (Tsutsui, 1984)

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- フォーマル: 助詞が現れやすい
- カジュアル: 無標識になりやすい

語と文の長さ (Tsutsui, 1984)

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 1 モーラ語の後は助詞が現れる (Tsutsui, 1984, p. 98ff.)
- 短い文のほうが無標識名詞が表れやすい (Jorden, 1974, p. 44)

NINJAL

疑問点

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 以下のことを想定すると東京方言・関西方言の有標識 vs. 無標識の対立はうまく説明できそう
- 典型的: 共起する頻度が高い=無標識になりやすい
  - 典型的な主題の例: 主語、定、有生、動作主、旧情報
  - 典型的な焦点の例: 目的語、不定、無生、被動作主、新情報
- 非典型的: 共起する頻度が低い=有標識になりやすい
  - 非典型的な主題の例: 目的語、無生、被動作主的
  - 非典型的な焦点の例: 主語、有生、動作主的
- 定、有生、動作主、旧情報の主語は本当に頻度が高いのか?
- 不定、無生、被動作主、新情報の目的語は本当に頻度が高いのか？

NINJAL

アウトライン

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

1 はじめに

2 情報構造関連の要因

3 情報構造とは独立の要因

4 コーパス調査

5 おわりに

6 Appendix

NINJAL

調査方法

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 関西（京都、大阪、奈良、兵庫）出身のお笑いコンビの漫才、コント、雑談を書き起こし（YouTube から、Appendix 参照）
- ハ、ガ、ヲが後続、あるいは無標識の名詞句を抽出
- 730 例

NINJAL

アノテーション (宮内他, 2018)

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 有生性: 生き物（有生）か否（無生）か
- 定性: 代名詞、固有名詞、既出の名詞、既出の名詞の一部（頭、鞄）、「その」「この」などの限定詞に後続する名詞 vs. それ以外
- 動作主性（S のみ）: 変化、意思性、移動あり（動作主性高）、なし（動作主性低）
- 代名詞 vs. 名詞: あれ、それ、これ、俺、お前 vs. それ以外
- (旧情報 vs. 新情報、前提 vs. 断定: すごく大事だがアノテーションが難しいので省略)
- 以上の変数の項構造別分布を見る
- どの変数がハ、ガ、ヲの出現、無標識に貢献しているか統計的に分析したかったが、今回は頻度のみ

NINJAL

結果

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

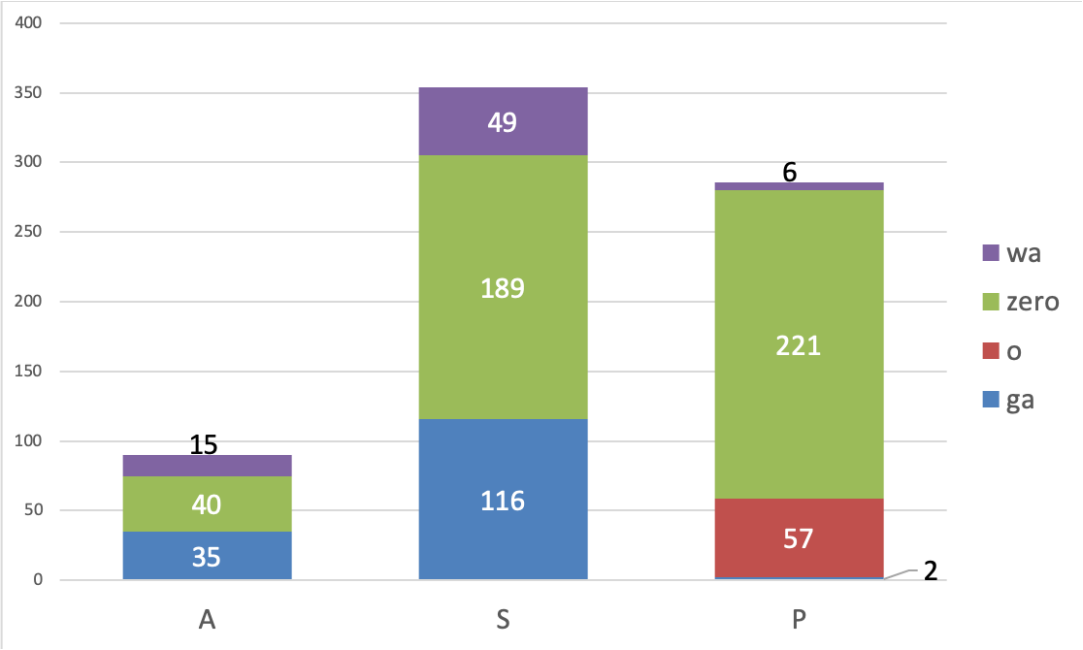

Figure: 項構造と助詞の分布

結果

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

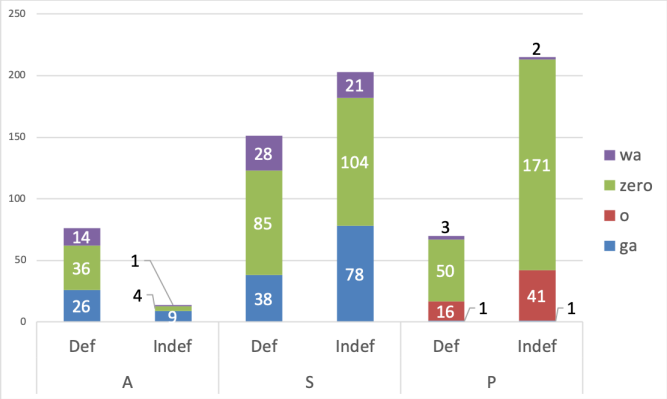

Figure: 定性の分布

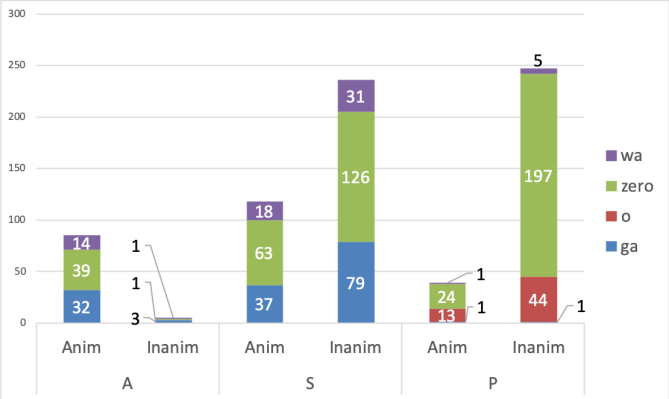

Figure: 有生性の分布

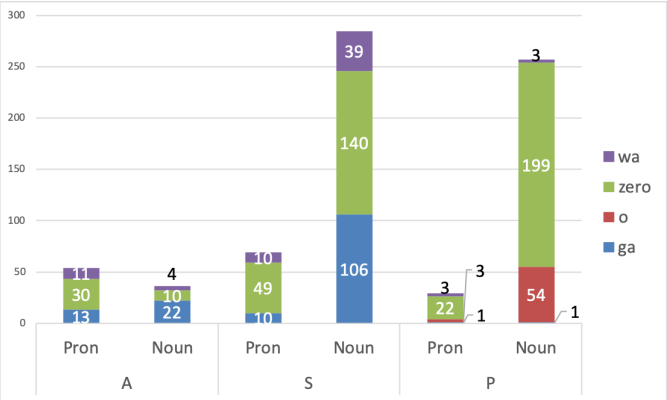

Figure: 代名詞と名詞の分布

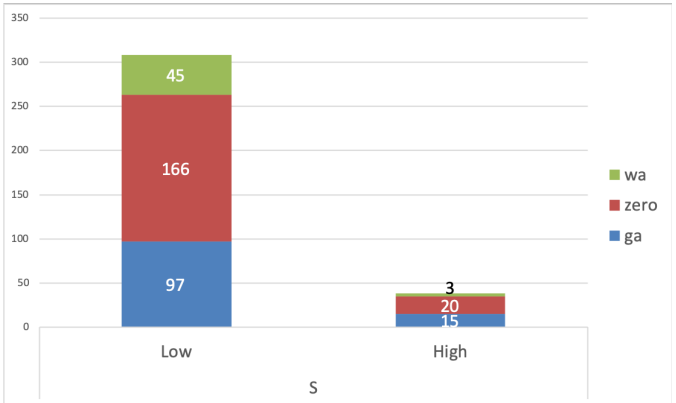

Figure: S の動作主性の分布

結果

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 定性
  - A: 定> 不定
  - S: 定 <不定
  - P: 定 <不定
- 有生性
  - A: 有生> 無生
  - S: 有生 <無生
  - P: 有生 <無生
- 代名詞 vs. 名詞
  - A: 代名詞> 名詞
  - S: 代名詞 <名詞
  - P: 代名詞 <名詞
- S の動作主性
  - 動作主高 < 低い
  - 変化、意思性、移動なしの文が多い

まとめ

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 以下の変数が揃った名詞句を典型的で最も頻度が高い主題、焦点と想定
- 典型的な主題、焦点は無標識、非典型的な主題、焦点は有標識で現れると仮定すると、東京方言と関西方言の助詞の出没がうまく説明できる
  - 典型的な主題: 主語、定、有生、動作主、旧情報
  - 典型的な焦点: 目的語、不定、無生、被動作主、新情報
- 典型的とされる主題、焦点の頻度が本当に高いのかどうかをコーパス調査
  - A: 典型的な主題の特徴を持った名詞句の頻度が高い
  - P: 典型的な焦点の特徴を持った名詞句の頻度が高い
  - S: A と P の中間、典型的な主題、焦点とは言えない

NINJAL

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

(23) 脱主題化仮説
主格ガは、主語が主題であるというデフォルト予測からの逸脱を標示する標識である。 (下地, 2019, p. 10)

- 主語（A, S）の全てがデフォルトで主題だとは限らない
- 定性、有生性など、他の要因と複雑に絡み合う

今後の課題

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- 主語、目的語、定性、有生性、動作主性、情報のステータスなどをコーパスでアノテーション
- 諸方言コーパスを使って各地の格体系を検証
- どの変数が有意に助詞の出没に貢献しているのか、統計的に検証
- 文焦点構文などはコーパスから判断が難しいかもしれないので、心理実験を併用する
- なぜ日琉諸語はこのように複雑な格体系なのか？

NINJAL

参考文献 I

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

Backhouse, Anthony E. (1993) *The Japanese language: an introduction*, Oxford: Oxford University Press.

Carlson, Gregory (1977) "Reference to kinds in English," Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst, Amherst.

Comrie, Bernard (1979) "Definite and Animate Direct Objects: a Natural Class," *Linguistica Silesiana*, Vol. 3, pp. 13-21.

——— (1983) "Markedness, grammar, people, and the world," in Eckman, Fred R., Edith A. Moravicsik, and R. Wirth, Jessica eds. *Markedness*, New York/London: Premium Press, pp. 85-106.

Du Bois, John W. (1987) "The Discourse Basis of Ergativity," *Language*, Vol. 63, pp. 805-855.

遠藤喜雄 (2014) 『日本語カートグラフィー序説』，ひつじ書房，東京.

Fry, John (2001) "Ellipsis and *Wa*-marking in Japanese Conversation," Ph.D. dissertation, Stanford University, CA.

NINJAL

参考文献 II

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

Fujii, Noriko and Tsuyoshi Ono (2000) "The occurrence and non-occurrence of the Japanese direct object marker *o* in conversation," *Studies in Language*, Vol. 24, No. 1, pp. 1–39.

Givón, Talmy (1976) "Topic, Pronoun, and Grammatical Agreement," in Li, Charles N. ed. *Subject and Topic*, New York: Academic Press, pp. 149-187.

Haspelmath, Martin (2006) "Against markedness," *Journal of Linguistics*, Vol. 42, No. 1, pp. 25-70.

Jaeger, Florian T. (2010) "Redundancy and reduction: speakers manage syntactic information density," *Cognitive Psychology*, Vol. 61, No. 1, pp. 23-62.

Jorden, Eleanor H. (1974) *Beginning Japanese. Part 1*, Tokyo: Tuttle.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』，ひつじ書房，東京.

NINJAL

参考文献 III

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

Keenan, Edward L. (1976) "Towards a Universal Definition of 'Subject'," in Li, Charles N. ed. *Subject and Topic*, New York: Academic Press, pp. 303-334.

Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge: MIT Press.

——— (1978) *Danwa no Bumpô*, Tokyo: Taishukan, [Grammar of Discourse].

Kurumada, Chigusa and Florian T. Jaeger (2013) "Communicatively efficient language production and case-marker omission in Japanese," in *Proceedings of the 36th Annual Meeting of the Cognitive Science Sciety*, pp. 858–863.

——— (2015) "Communicative efficiency in language production: optional case-marking in Japanese," *Journal of Memory and Language*, Vol. 83, pp. 152–178.

Makino, Seiichi and Michio Tsutsui (1986) *A dictionary of basic Japanese grammar*, Tokyo: The Japan Times.

NINJAL

参考文献 IV

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

Minashima, Hiroshi (2001) "On the Deletion of Accusative Case Markers in Japanese," *Studia Linguistica*, Vol. 55, No. 2, pp. 175–190.

宮内拓也・浅原正幸・中川奈津子・加藤祥 (2018) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』への情報構造アノテーションとその分析」，『国立国語研究所論集』，第 16 巻，19-33 頁.

Nakagawa, Natsuko (2013a) "Discourse Basis of Ergativity and Accusativity in Spoken Japanese Dialects," Master's thesis, State University of New York at Buffalo, Buffalo.

——— (2013b) "The Distribution of Zero Particles and Markedness in Japanese Dialects," in *Proceedings of the 146th meeting of Linguistic Society of Japan*, pp. 108–113, Linguistic Society of Japan.

——— (2016) "Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation," Ph.D. dissertation, Kyoto University, Kyoto.

NINJAL

参考文献 V

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

——— (to appear) *Information structure in spoken Japanese: particles, word order, and intonation*, Berlin: Language Science Press.

中川奈津子 (2020) 「関西方言における分裂自動詞性と能格性」，『日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究発表資料』.

丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』，和泉書院，大阪.

尾上圭介 (1987) 「主語に「は」も「が」も使えない文について」，『国語学』，第 150 巻，48 頁.

Perlmutter, David M. (1978) "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis," *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, Vol. 4, pp. 157–189.

下地理則 (2019) 「現代日本共通語 (口語) における主語の格標示と分裂自動詞性」，竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』，くろしお出版，東京，1-36 頁.

参考文献 VI

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

Tateishi, Koichi (1989) "Subjects, SPEC, and DP in Japanese," in Carter, Juli and Rose-Marie Déchaine eds. *Proceedings of NELS*, Vol. 19, pp. 405–418.

Tsutsui, Michio (1984) "Particle ellipses in Japanese," Ph.D. dissertation, University of Illinois, Urbana, Illinois.

竹内史郎・松丸真大 (2019) 「京都市方言における情報構造と文形態: 格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性」，竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格標示と分裂自動詞性』，くろしお，東京，67-102 頁.

Appendix: 漫才コンビ名と出身地

はじめに
情報構造的要因
対比性
項焦点
定性
有生性
意外性
語順
動作主性
その他の要因
ハもガも使えない文
スタイル
語と文の長さ
コーパス調査
調査方法
結果
おわりに
References
Appendix

- フットボールアワー（大阪）
- 中川家（大阪）
- ノンスタイル（大阪）
- 笑い飯（奈良）
- 麒麟（大阪、京都）
- ナインティナイン（大阪）
- バッファロー吾郎（京都、兵庫）
- ブラックマヨネーズ（京都）
- ダウンタウン（兵庫）
- 銀シャリ（大阪、兵庫）
- ハリガネロック（大阪、奈良）
- 千原兄弟（京都）
- チュートリアル（京都）
- 陣内智則（兵庫）